

中央日報 6/2

「しばし思いに耽っていた光山が、声高に歌い始めた。

『アリラン アリラン アラリヨ、アリランコゲロ ノモガンダ』

ふり絞るような悲痛な声であった。トメと二人の娘もそれに和して歌い始めたが、たちまち歌声は嗚咽になり部屋中に満ちた。いつのまにか皆肩を寄せ合っていた。」

1945年5月10日夜、日本 鹿児島県知覧飛行場近隣の食堂「富屋」での出来事を描写したノンフィクション『ホテル帰る』(2001年 赤羽礼子著)の一場面だ。光山は夜が明ければ帰らぬ人となるカミカゼ特攻隊員であり、トメは彼がただ一人心を許した食堂の女主人だった。翌朝、光山は予定通り250キロ爆弾を戦闘機に積んで出撃し、560キロを飛んで沖縄海上にて25才の短い命をとじた。

「大日本帝国陸軍少尉」光山文博の本名は卓庚鉉であった。知覧飛行場にて天皇から賜ったたった一杯の酒に「一機一艦」の決意を胸に、命を捨てる自殺特攻隊は1036名にのぼる。そのなかに卓庚鉉を含む11人の朝鮮人があった。

卓庚鉉は見習い士官の頃から朝鮮の出自であることを明かしていた。彼の御霊は靖国神社に祀られており、折に触れて日本総理が参拝している。戦闘帽を被った彼の遺影は遊就館に展示されている。

昨年、卓庚鉉の命日に合わせて彼の故郷である慶南泗川市に慰霊碑を建てようとした日本人達がいた。彼等は慰霊碑建立が韓日間の和解のための小さな始発点になると信じた。卓庚鉉をモデルにした映画『ほたる』(高倉健主演)のように。映画ではカミカゼ特攻隊の朝鮮人少尉の部下であった日本人生存者が遺品を抱いて韓国の生家を訪れる。はじめは頑なに拒否するが遺族は遺品を受け取るに至って和解してゆく。

しかしながら現実とはまったく違っていた。住民達と関連団体の反対デモに遮られ除幕式は中止、慰霊碑は撤去された。故郷においてさえ卓庚鉉は日帝協力者でしかなかったのだ。韓日間の本当の和解にはいまだ期が熟していないということを、この度の事件が示した。それ以前に先行しなければならない謝罪や許しがはっきりと成されていないからだ。

志願にしろ、仕方なく行かざるを得なかったにしろ、卓庚鉉もまた歴史の犠牲者に他ならない。死出の旅路へと赴く前夜、祖国を思いアリランを歌った彼が、翌日には「天皇陛下万歳」を叫びながら死への航路を突進せねばならなかったというのは全くの悲劇だ。どうすることもできない狂気の歴史のなかでは、個人の運命など弱々しく小さなものでしかない。卓庚鉉のはかない死、だからこそ誰もがそれを悲しむのだ。